書評

# 中山昭吉著『近代ヨーロッパと東欧——ポーランド啓蒙の国際関係史的研究——』

小山　哲

## 一

本書は、長らくポーランド啓蒙研究に携わってこられた著者が、その二〇年来の成果をまとめられたものである。著者はわが国における専門的なポーランド史研究の創始者の一人であり、本書の意義はなによりもまずそのパイオニア的性格にあるといえよう。初期近代から一九世紀前半にかけてのポーランド史に関する専門的な研究書がこれまで一冊も書かれていなかったという我が国の現状を考えれば、本書の刊行はひとつの画期をなすものであるといえる。しかし、著者の意図は単なる空白の穴埋めの域をはるかに越えている。

「ヨーロッパ史」が「西ヨーロッパ史」と等号で結ばれるものではないということは指摘されて既に久しいし、近年のヨーロッパの激変はそのことを我々にますます強く実感させつつある。しかし、実際に東・南・北欧圏の研究成果まで十分に咀嚼して視野に収めたうえで有機的に構成されたヨーロッパ史叙述は、少なくとも我が国ではいまだなされていない。そもそもそのような企てが一人の人間の力で成し遂げられうるものか否か、専門分化した情報の洪水の中に生きる今日の西洋史家は懐疑的にならざるをえないであろう。とすれば、せめて個別の問題についてヨーロッパ内部の壁をひとつでも越えた議論ができないものであろうか——『近代ヨーロッパと東欧——ポーランド啓蒙の国際関係史的研究——』という本書のタイトルは、こうした要求に応えてくれそうな期待を抱かせる。

実際、以下に示すように本書は「ポーランド啓蒙」を梃子にして従来の近代ヨーロッパ史像を大胆に組替えようとしており、随所にきわめて挑発的な主張が盛り込まれている。この点が、著者独特の個性的な文体とも相まって、本書をはなはだユニークなものにしている。と同時に、本書の抱える問題点もまたそこに由来しているように思われる。以下、本書の内容を著者の論理に即して整理したうえで、評者の感じた点を述べさせていただくことにしたい。

## 二

本書の基本的立場は、冒頭に置かれた「まえがき」に既に明らかである。著者によれば、我が国の「戦後史学」の近代ヨーロッパ史は「冷戦下の東西二極構造を担う「勝者」による正史」であり、真の「近代ヨーロッパ」の本質的理解を阻害し続けてきたのは「西欧的「近代史学」とソヴィエト的「人民史学」の絶対的優位性」である。そこで著者は、こうした「戦後史学」からの脱却

を求めて、本質的に「国際関係史的概念」であるところの「啓蒙」を主題として「「敗者」としての歴史的「東欧」からの論理で「近代ヨーロッパ」をより徹底的に読み直そう」とする。

この「読み直し」の具体的な成果が、序章とそれに続く三部九章から構成される本論である。序章は問題提起と研究史の整理から成るが、ここでの問題設定の特徴は、「啓蒙」概念を問題領域・時代・空間の三次元にわたって著しく拡大している点にある。まず、著者は「啓蒙」概念の原点としてカントの『啓蒙とは何か』から「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」を挙げ、そこに「思想」に限定されない「啓蒙」の対象領域の広がりと「世界的普遍性ないしは国際的無国籍性」を読み取ろうとする。従って、「啓蒙」研究においては狭義の「思想」のみならず、政治的改革・社会運動等をも含めて「一切の個人、社会集団、国家、それに民族レヴェルでの総体的把握が終対条件」となる。また、「啓蒙」の可及的上限を一六世紀に、下限を一九世紀中葉に設定し、空間的にも「大西洋からウラル山脈まで」を視野に入れようとする。この広大且つ多次元にわたる「啓蒙」現象の中で特に「ポーランド啓蒙」に着目する理由としては、①複合多民族・多宗教国家の多元的体質に由来する先駆性と西欧への影響、②一八世紀後半におけるポーランド国民文化の確立とドイツ文化圏構成員との民族的確執・対決のもとでの「啓蒙改革」の強行と分割による挫折、③伝統的近代ヨーロッパ史が抹殺してきた分割後の再生「ポーランド啓蒙」の役割の再評価、といった点が挙げられている。この三点は、それぞれ続く本論を構成する三つの部分に対応している。

第Ⅰ部「ポーランド啓蒙の源流と初期西欧啓蒙」は、中世まで遡ってポーランド啓蒙の歴史的源流を探り、その遺産がポーランド内外にどのように継承されたかを辿っている。第一章「ポーランド一六世紀的伝統」は、啓蒙思想家スターシツの「ポーランドは、ようやく一五世紀に位置しているに過ぎない」という警世的発言を手がかりに、ポーランド啓蒙が一四世紀のカジミェシュ大王統治時代と一六世紀のルネサンス・宗教改革期を自らの祖型とし、間に挟まれた一五世紀と一七世紀を克服されるべき後退期として把握していたことを論証しようとする。一四・一六世紀の共通性としては、対外的安定、強力な王権による農民・都市民の保護とシュラフタ勢力の抑制、複合多民族国家内での外来・都市的要素の尊重、社会・経済的発展、宗教的寛容、文化的高揚等が指摘されている。こうした特質を著者は「ポーランド一六世紀的伝統」と呼ぶ。一五・一七世紀はこの特質の裏返しで、土着カトリック的シュラフタ勢力が支配的な停滞と不毛の時代とみなされる。第二章「ポーランド兄弟団（ソッツィーニ派）と初期ポーランド啓蒙」は、著者が「一六世紀的伝統の直系的継承勢力」とみなす「ポーランド兄弟団」のポーランド内外における活動を追跡する。一六世紀にポーランド・カルヴァン派教会から分かれ出た反三位一体派は、ファウスト・ソッツィーニのもとで教団として確立し、拠点ラクフの学院と出版所は国際的名声を博する。しかし、一七世紀に反宗教改革が進む中で弾圧を受け、西欧に離散していく過程でピエール・ベールやジョン・ロック等の形成期の啓蒙思想家と接触を持った。特にロックに関しては「準ポーランド兄弟団」とみなしうると著者は指摘する。以上のように、第Ⅰ部において著者は一六世紀がポーランド啓蒙の祖型として捉えられていたこ

と、また、ポーランド兄弟団を媒介として形成期西欧啓蒙とポーランド一六世紀的伝統が密接不可分の関係にあることを主張しようとした。

第Ⅱ部「「啓蒙の世紀」ヨーロッパのポーランド啓蒙」は、ポーランド内で継承された一六世紀的伝統と、離散したポーランド兄弟団を通じて西欧の啓蒙思想家に継承されたそれとが一八世紀にポーランド人の手によって再び接合され、ポーランド啓蒙へと発展していく過程を描く。第三章「フランス啓蒙と亡命国王レシチンスキ」は、一八世紀前半にポーランド王位継承に失敗してフランスに逃れたスタニスワフ・レシチンスキを、この内外二大源流の合流点として位置づける。著者は、レシチンスキ家の家系的伝統（プロテスタント）を辿ることによりスタニスワフが一六世紀的伝統の内なる担い手であることを指摘する一方、亡命先のフランスにおける啓蒙思想家との交流関係に着目する。特に重視されているのはヴォルテールとモンテスキューであり、両者は共にレシチンスキと密接な協力関係を保ち、また、イギリスのソッツィーニ派との接触を通してポーランド一六世紀的伝統の継承者となったとみなされる。著者は書簡等の断片的記述を検討し、ヴォルテールの『哲学書簡』は「レシチンスキ父親宛書簡集」であった可能性があり、また、モンテスキューの『法の精神』はレシチンスキとの双務契約に基づく「帝王学教科書」的「フランス統治論」として構想された、という驚くべき結論（仮説？）に達している。いずれにせよ、こうしてレシチンスキにより接合された内外のポーランド一六世紀的伝統は、第四章「コナルスキにみる先駆的ポーランド啓蒙思想家像」の主人公スタニスワフ・コナルスキを結節点として、フーゴ・コウォンタイにより継承・発展され、ポーランド啓蒙の最盛期を築くことになる。コナルスキに関しては、後の国民教育委員会の創設につながる教育改革を中心とするその社会的実践が、「ザクセン時代の暗黒」の中で文化的主導権を握るドイツ系都市民等に対する土着的ポーランド的要素の国民的覚醒と直結していたこと、ポーランド啓蒙においてカトリック聖職者が積極的役割を演じていること等が指摘されている。第五章「「一七九一年五月三日憲法」とコウォンタイの役割」は、「ポーランド啓蒙の一大成果」である「五月三日憲法」の成立過程と内容を紹介し、コウォンタイの憲法草案との比較検討を通じてこの人物が果たした指導的役割を浮き彫りにしようとする。しかし著者はそれだけでは満足されず、舞台を大きく広げて「大西洋革命論」の再検討を試み、ポーランド一六世紀的伝統→アメリカ合衆国憲法→ポーランド五月三日憲法→一七九一年フランス憲法という系譜関係を導き出す。ここでも媒介者としての役割を担っているのは反三位一体派（「ポーランド兄弟団」＝ソッツィーニ派・ユニテリアン派）である。第六章「コシチューシコ蜂起敗北とユダヤ人」は、第二次分割後の分割三列強に対するコシチューシコ蜂起をポーランド啓蒙の到達点とみなし、とりわけ蜂起の過程でユダヤ人の果たした役割にポーランド啓蒙の栄光と限界性が集約されていると論ずる。ポーランドにおけるシュラフタ主導型の啓蒙革命は複合多民族性を踏まえた国家統合を実現し得ず、とりわけ「ユダヤ人の歴史的存在性」が「致命的アキレス腱」となった。しかし、蜂起敗北と第三次分割による挫折は、ユダヤ人問題（とりわけユダヤ人内部の啓蒙運動である「ハスカラー」）及びそれと

密接に結び付いたポーランド啓蒙の国際化をもたらした。この問題の検討が、続く第Ⅲ部「ナポレオン・ウィーン両体制下の啓蒙ポーランド一八世紀的伝統」の主たる課題となる。

第七章「コシチューシコにおける反ナポレオン的行動原理」は、蜂起失敗後一時合衆国に逃れた後フランスに赴いたコシチューシコが、ナポレオンとの提携を周囲から期待されながらも、局外中立の立場を堅持した理由を探る。著者は、反ナポレオン的行動をコシチューシコの反専制主義・愛国主義的民主主義の帰結として説明するポーランドの通説的見解を批判し、コシチューシコの行動原理はその「親チャルトリスキ家的立場にすぎず、この家系に継承されていたリトアニア主導型ポーランド啓蒙を反映したものであった」ことを主張する。同時に、コシチューシコが積極的に関与しなかったワルシャワ公国建国を、「王国領基盤のポーランド軍団将兵や国内進歩諸勢力の主体的参加による成果」として再評価している。第八章「スターシツとポーランド初期汎スラヴ主義」は、この都市民出身の啓蒙思想家の自伝、日記、政治的著作を検討し、晩年のスターシツがスラヴ民族統合理念の形成におけるポーランド国民の役割を力説し、汎スラヴ主義の先駆的提唱者となったことを論証する。著者は、従来ロシアやチェコ系譜のものに比べポーランド系譜の汎スラヴ主義が軽視されてきたことに異議を唱え、その再評価を促している。最終章である第九章「「諸民族の春」と再生ポーランド啓蒙――ウィーン体制期ハスカラーと関連づけて――」は、一九世紀前半の諸民族の革命運動がヨーロッパ各地に分散したポーランド人及びポーランド系ユダヤ人の活動と密接な関連を持っていたことを明らかにしようとしている。一八三〇年の一一月蜂起の挫折後の「大亡命」は、「啓蒙ポーランド一八世紀的伝統」の直系的継承勢力を「啓蒙革命戦士」として西欧諸国に送り出し、やがて彼らが「諸国民の春」を準備した。その際に革命運動のひとつの原型とみなされるのが一八四六年二月のクラクフ蜂起である。著者はそこで示された「立憲体制確立、民族解放と国家再建、ユダヤ人完全解放、革命的社会政策の推進」という蜂起側の主張を「クラクフ蜂起モデル」と呼ぶ。次いで、ブリュッセルやパリにおけるポーランド系亡命者の動向を追い、状況証拠を積んでいくことによってクラクフ蜂起二周年記念日に当たる二月二二日に始まった「パリ二月革命」が、このモデルを継承するものであったことを示そうとする。さらに著者は四八年から翌年にかけての「諸国民の春」の展開過程の中で啓蒙ユダヤ人を含めたポーランド系「啓蒙革命戦士」が随所で広範な活動を繰り広げていることを指摘し、クラクフ蜂起からハンガリー革命敗北に至る一連の革命運動を「再生ポーランド啓蒙」・「一八四〇年代後半の東欧主導型ヨーロッパ諸民族の春」として把握すべきことを提唱している。

以上のような広範囲にわたり且つ豊富な内容を持つ本書の特色をあえて要約するならば、次のようになろう。第一に、本書全体を一貫して貫いているのは、ポーランド一国（一民族）史や「西（或は東）ヨーロッパ史」の枠組を越えて国際関係史的に対象を把握しようとする強固な意志である。そのため、上述のように「啓蒙」概念が時間・空間・問題領域の三次元にわたって拡大されていることとも相まって、本書の叙述の舞台は巨大なものとなっている。その広大な舞台の上を国家や民族の枠を越えて有名・無名

の多数の人物が縦横に駆けめぐり、交流し、影響を与え合うさまは壮観である。第二に、従来の近代ヨーロッパ史研究及びポーランド史研究において周縁的と見なされてきた対象に積極的な意味づけが与えられている。即ち、「啓蒙」研究一般に関しては、「ポーランド啓蒙」の国際的貢献（時にはその主導的役割）が強調されることによって「西欧中心史観」が批判され、ポーランド史研究に即して言えば、都市民・ユダヤ人・外来的要素が重視され、「シュラフタ中心史観」・「人民史観」が批判されている。第三に、本書はポーランド中世・近代史を次の二つの観点から再構成しようとしている。ひとつは分割に先立つポーランド国家を複合多民族国家として捉える視点、いまひとつは「一四世紀的伝統」→「一六世紀的伝統」→「ポーランド啓蒙」→「再生ポーランド啓蒙革命」という系譜関係を強調する視点である。この二つの視点は、後者の系譜に含まれる時期には複合多民族性を尊重する傾向が強いとみなされる点で、連関している。

本書の特徴を以上のようなものと捉えた上で、残された紙面を借りて、評者の感じた疑問点に触れてみたい。

## 三

本書を読みながら評者は、過去の歴史叙述の中で不当に軽視されてきた存在に正当な地位を回復せんとして熱っぽく語られる著者の態度に共感を覚え、また、その壮大なスケールと次々に繰り出される大胆な問題提起に驚嘆しつつも、何度ももどかしい思いにとらわれた。このもどかしさは主として本書の独特の論証の手続きに関わっている。著者が個々の思想家・活動家の立場や思想家相互間の影響関係を論ずる際に手がかりとされているのは、主として人的関係、家系的伝統、出生地、帰属する宗派といった要因である。しかしながら、特定の人物の世界観や複数の人物間の思想的影響関係を論証する際には、これらの要因は必要条件にはなっても、十分条件にはなり得ないのではないか。仮に二人の人物が或る時或る場所で出会っている（場合によっては親しく接している）ことが示されたとしても、両者の間に思想上の一致が存在したという証拠にはならない。必要とされるのは、状況証拠の積み重ねではなく、それらの人物の遺した著作や発言の内在的分析と、その結果を踏まえたテキスト相互間の比較研究であろう。本書の中でも、例えばスターシツを取り上げた第八章では比較的入念なテキストの検討が行われ、論証に安定感を与えている。

しかし、本書の最大の功績ともいうべき大西洋からウラル山脈にまたがる人的ネットワークの存在の検証に際して、そのような手続きが常に十分ふまれているとは言い難い。そのため、作業仮説として読んでいた見解が著者にとっては論証済みの結論であると知って、読み手は随所で戸惑いを覚えることになる。「環大西洋啓蒙革命」や「東欧主導型ヨーロッパ諸民族の春」といった重要な問題提起に関してもこの問題はつきまとっているように思われるが、ここでは紙幅の関係からひとつだけ、典型的なケースとしてレシチンスキとフランスの思想家たちとの関係を扱った第三章を取り上げてみよう。ヴォルテールが『哲学書簡』でソッツィーニ派に言及しているのは確かであるし、ロレーヌにレシチンスキを訪ねているのも事実であるが、レシチンスキとの交流が『書簡』執筆の動機であったとは、ここに示されている状況証拠だけ

からでは納得し難い。レシチンスキが親ソッツィーニ派であったということは「家系的伝統」だけでは立証し得ないし、[1]ヴォルテール自身が『回想録』で描くところのイエズス会神父の虜になっているレシチンスキの姿を考えれば、[2]両者が思想的にぴったり重なり合っていたと考えるのはむしろ不自然である。モンテスキューとレシチンスキとの関係にしても、思想上の密接な相互協力を言うのであれば、前者の『法の精神』と後者の（執筆と著者の考えておられる）『自由の声』や『王国行政論』の、目次だけにとどまらないより綿密な内容の比較分析が必要であろう。ルソーとの関係についても、著者の引用されている「ポーランド王への回答」の公的賛辞（一六〇頁）よりも、『告白』におけるやや皮肉な筆致の方がこの思想家の本心に近いと思われる。[3]

ここで評者がレシチンスキにこだわったのは、この人物が本書の中でポーランド啓蒙の内・外二大源流の結合という重要な役割を担わされているからである。しかし、そもそもこのような重大な役割を特定の「個人」に割り当てることに無理はないであろうか。同様のことは「一六世紀的伝統」を「ポーランド兄弟団」という特定の（しかも数の上では弱小な）「セクト」に帰している点についても言える。個別的な論点の解釈ならともかく、大きな思潮の変遷を論ずるのであれば、問題とすべきは特定の個人・セクトよりむしろ、それらを含んだ諸勢力・諸潮流の「布置」であろう。個々の思想家やセクトの活動は彼らがこの布置の中で占める位置に規定されているし、同一のセクトでも置かれている布置が変われば異なった性格を帯びうる。ポーランド史に即して言えば、一六世紀にはコハノフスキやフリチ＝モドジェフスキのように宗派間の和解を唱える媒介的知識人が存在したが、反宗教改革の高揚期にはこのような調停者は存在し得ず、宗派的分裂が露呈する。その緊張の中で、ルネサンス的風土の中で活動を開始したポーランド兄弟団もまたカトリック勢力と並んでバロック文化の重要な一翼を担うに至る。こうした変化は特定のセクトに常に一定の思想的・文化的傾向を帰属させようとするアプローチでは説明できない。[4]同様のアプローチはまた、同一宗派内部に存在するニュアンスの相違を見えにくくする。例えば著者は啓蒙期のユダヤ人内部の運動である「ハシディズム」と「ハスカラー」をほぼ同質のものと捉えておられるが（二六六頁）、民衆に基盤を持ち宗教性の深化を目指す前者と社会上層部から始まり生活の世俗化を唱える後者とでは、運動の方向がかなり異なるのではなかろうか。[5]とすれば、仮に革命運動に身を投じた或る人物が「ユダヤ系」であることがわかったとしても、それだけでは彼がいかなる理念に基づき、何を目指して行動していたかはいまだ明らかではないのである。

本書のキー概念のひとつである「一六世紀的伝統」には、また別の問題もある。上述のように著者はポーランド啓蒙の祖型として一四世紀の「カジミェシュ大王の偉業」とそれを継承した「一六世紀的伝統」を挙げられ、間に挟まった一五・一七世紀を停滞と不毛の時代とされる。これは典型的な「啓蒙史観」である。スターシツの発言を出発点とする以上当然の成行きとも言えるが、叙述の過程でともすると啓蒙期の歴史像が歴史の実態と同一視されがちであるのは気になる。両者は明確に区別されねばならない。啓蒙思想家が一般にバロック文化やサルマティア主義を肯定的に

捉えていなかったのは確かであるが、今日の時点から見ればまた違った評価も可能である。特にバロックに関してはポーランドでも六〇年代後半以降研究と再評価が進み、それがルネサンスからの後退ではなく独自の様式の達成とみなされるべきことは文化史研究者の共通の了解事項になりつつある。[6] また、啓蒙期以後のポーランドの政治文化を考えるうえでシュラフタ共和制の歴史的遺産が果たした役割にはより積極的な側面もあるのではなかろうか。[7] 実際、第三章までの叙述でポーランド啓蒙の祖型を非カトリック的・非シュラフタ的伝統に固着させ過ぎた結果、第四章以下の啓蒙の「最盛期」の性格規定（土着ポーランド的要素の国民的覚醒、シュラフタやカトリック聖職者の指導性）と齟齬をきたしているようにも思われるのである。

この点とも関わるが、近代ヨーロッパ史の大胆な読み直しを意図する本書は、果して従来の西ヨーロッパ中心の「啓蒙」研究と異なる新たな「啓蒙」像を提示し得ているのであろうか。この点で著者が「啓蒙」概念を規定する際にカントの定義に依拠していること（一頁）は評者にとっては些か残念であった。悟性の使用によって「未成年状態」から脱却することを「啓蒙」と呼ぶこの発想は、なるほど当時の「啓蒙」観の一面を端的に示しているし、後世の人々の「啓蒙期」像に及ぼした影響も大きい。しかし、ポーランドの啓蒙主義者が直面していた問題は果してカントの抱えていた問題と同一であったのだろうか。むしろそれこそが問われるべき問題であるように思われる。たとえ「啓蒙」が究極的には「無国籍」的な「普遍性」を目指す理念であったとしても、その個々の担い手はそれぞれ固有の歴史的環境の中に置かれている。敢えて「ポーランド啓蒙」の側から「啓蒙」研究一般に問題提起をする意味は、従来支配的であった「啓蒙」観の「普遍性」を自明の前提としたうえで「ポーランド啓蒙」の先駆性や限界を指摘することにではなく、そうした「普遍性」を前提とするがゆえに見過ごされてきた側面に光を当て、そこから新たな歴史的「啓蒙」像を構築することにこそあるのではなかろうか。例えばジスワフ・リベラはポーランド「啓蒙」研究を展望した論考の中で、ホルクハイマー／アドルノの「啓蒙」批判をもふまえながら、研究者の間でポーランド「啓蒙」の多面性と内的葛藤の様相が認識され始め、そこから「啓蒙的サルマティズム」や「カトリック啓蒙」といった新たな概念構築がなされつつあることを指摘している。[8] それは、カトリシズムやシュラフタ文化の遺産をポーランド「啓蒙」の「限界性」と捉えるのではなく、まさしくそのような要素を不可分のものとして含みながら展開していった点にポーランド「啓蒙」の独自性を探求していこうとする立場である。「ヨーロッパ啓蒙」像をより豊かなものにするための一つの方向がそこに示されていると評者は思うのだが、著者はどのように考えられるであろうか。

## 四

以上、評者の気付いた点について述べてきた。本書の内容が多岐にわたっているのに対し評者自身の能力は限られており、すべての論点に言及することは諦めざるを得なかった。論評が本書の前半部に偏っていることをお詫びすると同時に、本書には評者の内容紹介では洩れ落ちている独自な見解も数多く提起されている

ことを強調しておきたい。

細部に様々な問題を抱えているにせよ、本書が従来の我が国の西洋史研究において十分認識されてこなかった広大な人的・知的交流の存在を浮かび上がらせていることは確かであって、このことの意義は高く評価されなければならないであろう。それは、「ポーランド啓蒙」を足場にして初めて見えて来る風景なのである。著者の切り拓かれた地平には豊かな鉱脈が数多く眠っている。今後それをより実証的な手続きによって掘り起こしていくことこそが後進の務めであり、また著者のパイオニアとしての長年の労苦に報いる道であると信じて、敢えて浅学の身を省みずに筆を執らせていただいた。多々あるであろう誤読・誤解や的はずれの論評に関しては、著者及び読者の方々の御寛容を乞うばかりである。

① レシチンスキ家が密接な関係を持っていたのは三位一体の教義を否定しないボヘミア兄弟団であり、レシチンスキ自身はソッツィーニ派に批判的な発言をしている。J. Tazbir, *Arianie i katolicy*, Warszawa 1971, s. 87.

② 『ヴォルテール回想録』(福田忠恕訳)、大修館書店、一九八九年、七一―七四頁。

③ ルソー『告白』(桑原武夫訳)、中、岩波文庫、一九六五年、一四一頁。

④ H・R・トレヴァー＝ローパー「啓蒙主義の宗教的起源」(同『宗教改革と社会変動』(小川晃一・石坂昭雄・荒木俊夫訳)、未来社、一九七八年所収)は著者と同様の問題を扱い、ソッツィーニ派にも言及しているが、特定のセクトにではなく、各宗派・教会内で異端的な位置を占める者に啓蒙主義の起源の担い手を見いだしている点が著者とは異なる。同書、一二二頁参照。

⑤ A. Eisenbach, *Emancypacja Żydów na ziemiach polskich 1785–1870 na tle europejskim*, Warszawa 1988, s. 44–51.

⑥ A. Sajkowski, *Barok*, wydanie drugie poprawione, Warszawa 1987, s. 5–14, 94–101.

⑦ Cf. A. Walicki, *The Enlightment and the Birth of Modern Nationhood: Polish Political Thought from Noble Republicanism to Tadeusz Kościuszko*, Univ. of Notre Dame 1989; M. B. Biskupski and J. S. Pula (eds.), *Polish Democratic Thoughi from the Renaissance to the Great Emigration: Essays and Documennts*, Columbia U. P. 1990.

⑧ Z. Libera, *Wiek Oświecony: Studia i szkice z dziejów literatury i kultury polskiej XVIII i początków XIX wieku*, Warszawa 1986, s. 10–19.

(A5判　二〇＋五〇二頁　一九九一年二月　ミネルヴァ書房
六五〇〇円)

(島根大学助教授　　)